氏　　名	小田　健太
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　８４３４　号
学位授与年月日	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	李賀研究
主　　査	筑波大学　教　授　　博士（文学）　　小松　建男
副　　査	筑波大学　准教授　　博士（文学）　　稀代　麻也子
副　　査	筑波大学　教　授　　博士（文学）　　井川　義次
副　　査	東京女子大学　特任教授　　博士（文学）　　安藤　信廣

論　文　の　要　旨

本論は、李賀の詩に見える詩語と詩句の独自性を明らかにした上で自己表象の諸相について検討を加え彼の表現者としての在り方を明らかにするものである。論文の構成は以下の通り。

序論

上篇　表現における試行

第一章　「傷心行」の「落照」と「飛蛾」について

第二章　「花作骨」の批評効果とその淵源

第三章　「酒闌感覚中区窄」の句をめぐって

第四章　「雁門太守行」の初二句について

第五章　詩的素材の自在性――碧血の系譜を例として――

下篇　自己表象論

第一章　疾病表現について――自他の間を取り持つ媒介――

第二章　年齢表現について――屈折と疎外の自己表象――

第三章　自称表現について――表現者としての自己をめぐって――

第四章　「感諷五首」論――自己認識の変容とその契機――

第五章　他者としての李賀――黄景仁の李賀受容を手がかりとして――

結論

序章において、著者は、李賀の詩がどのようにそれ以前の詩人が開拓してきた表現を独自の形で自らの中に取り込んでいるかという視点から李賀の詩の特異性を探究すると述べる。

上篇第一章では、「傷心行」に見える詩語「落照」・「飛蛾」を取り上げる。李賀は本来落日を意

味する「落照」を、灯火と結びつけて使用される「飛蛾」と取り合わせることで、火勢の衰えた灯火へと転化させたところに新しさがあると指摘する。第二章では、友人の詩才を「花作骨」と評価したことを取り上げ、その表現上の淵源について検討する。著者は、李賀以前の例では、「花作骨」は、「花」と「骨」のうちの「骨」に重点が置かれた表現であるが、李賀は人物と文学に関連する二種の批評用語を織り交ぜることで、それぞれの語が本来的に所有している具象性を浮き上がらせたと主張する。第三章では、「酒闌感覚中区窄」という句を中心に検討を加える。李賀以前の詩において、「中区」（安定的統治空間）は肯定的な存在であったが、李賀は一転して否定的文脈（「窄」）に用いている。このような既成の詩語に付随するイメージを反転させるという手法に李賀の特色が認められると主張する。第四章では、「雁門太守行」の初二句を取り上げる。著者は、先行する用例を調査した上で、「黒雲」が、城を押しつぶしそうだという発想の斬新さ、月光を受けて輝く鎧を「甲光」と「金鱗」という語彙の特異さを指摘し、この句が、兵士と月を結ぶ空間、光の往来する広い空間を含んだ奥行きのある表現になっているところに特色があると指摘する。第五章では、「萇弘化碧」故事に基づく表現の系譜を取り上げる。この故事を、他の詩人は固定的なイメージで受容しているのに対し、李賀は硯や自己の精神に転化して用いているところに特色が見いだせると指摘する。

下編第一章においては李賀が自己の病をどう表現しているかを考察する。知友に向けた詩と異なり、身内に向けた詩には、病という否定的状況を、人間の生全体を視野に入れればそれは取り立てて悲観すべきものではないと受け入れ、俯瞰を契機として価値の転換を試みていると著者は主張する。第二章では年齢表現を取り上げる。現実世界において未来への希望をたたれた李賀は、自己認識の次元においても未来と断絶してしまった結果、有名な「二十心已朽」の句を生み出したと指摘する。第三章においては、固有名詞を含む自称表現、及び李賀が自称詞として用いた「書客」の語を取り上げて、彼が自己をいかに造形していたのかを探求している。固有名詞を含む自称表現の場合は、「隴西長吉摧頽客」のように自己の否定的側面を語る表現が見受けられ、また李賀に特徴的な詩語である「書客」の語には、他とは区別されるべき書記行為者としての自負を抱き続けていることを示していると指摘している。第四章では連作詩「感諷五首」に着目し、連作の展開によって表象される語り手の姿を明らかにする。〈其一〉と〈其四〉に用いられている「知」の語の用法の違いや、典故人物の描き方から、「感諷五首」は語り手の内面的な変容を綴っていくところに、本質的な主題が隠されており、その変容のきっかけとなっているのが、〈其三〉であると指摘する。第五章においては、清・黄景仁における李賀の受容を手掛かりとして、後世の詩人にとっての李賀、すなわち他者としての李賀がいかなる存在であったのかについて検討を加えている。李賀の「秋来」詩を踏まえた黄景仁の諸詩が、単なる模倣に終わっておらず、両者の感性の間には大きな相違があることを確認し、黄景仁にとっての李賀とは自分には見えないものを認め、聞こえないものを聞きとめ、生来的な感性によって不在を存在として語る詩人であったと指摘する。

結論では、李賀の特異な表現は、彼の自己認識と結びついており、李賀が抱えざるをえなかった懐疑や疎外、葛藤や矛盾は、彼に批判的視点を付与し、継承と断絶、肥大と矮小、肯定と否定、集団への憧憬と意図的な孤立、といった項目について、一方への傾斜を拒否して、対象をするどく見つめたままそれから乖離していく、いわば後ろ向きに歩を進めるような危うさが、李賀の文学に精彩を与えていると主張して結論としている。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、中唐の詩人李賀の詩が特異と評される原因について、李賀以前のまた同時代の詩人の表現と詳細に比較することで説得力ある根拠を提示し、更にこのような作品を生み出す詩人とはどのような人物であるのかを明らかにし得たものとして高く評価することができる。

李賀は、理不尽な理由によって進士科受験を拒絶され、27 歳で早世した詩人である。特異な詩を作る詩人と見なされている。しかしながら特異とは常に特異でないものとの対比において認められるものである。特に中国では、過去の詩に見える来歴のある言葉を使用することが望ましいとされる。李賀もこの要請を無視して詩作をしているわけではない。

上篇において著者は、来歴のある言葉を使いつつも特異と言われる原因を、語と語の結びつきの意外性が生み出す独自で自在な意味の変容にあると主張する。例えば「落照」は、李賀以前においては常に落日の意味で用いられているが、彼は燃え尽きようとする灯火の意味に転用する。読者がこのような転用を理解するのは、この語が灯火に集まる蛾を指す「飛蛾」とともに用いられているためであり、これによって読者は落日の衰えを灯火の衰えと二重写しにして理解することが可能になると指摘する。また「中区」は李賀以前においては常に肯定的に歌われるのであるが、李賀は「中区窄」と閉塞感を歌い読者を驚かせていると主張する。これまでの研究では一語をさして特異な表現と指摘することはあっても、このように語と語の結びつきに特異さの原因を求めることはなかった。しかも著者は可能な限り用例を精査した上で立論しているので大変説得力がある。

下篇において、著者は李賀が詩においてどのように自身を規定しているのかを探求し、李賀が本来であれば希望に満ちているはずの 20 歳の自分を「心已朽」と歌わざるを得なかったように、あるべき自己から疎外され、しかも相反する価値を同時的に内包せざるをえない複層性ないし矛盾をはらんだものとして自らを把握していたことが、表現における特異性の根本にあると指摘する。この見解は、著者による緻密な作品分析に支えられて大いに説得力を持つ。

以上優れた論考ではあるが、なお課題も残されている。今回検討の対象とした作品は、李賀の主要な作品ではあるが、全作品ではない。今回取り上げなかった作品にも更に対象を広げる必要があるであろう。しかしこれは著者の今後の研鑽にまつものであって本論文の価値を何ら損なうものではない。

2　最終試験

平成３０年１月１９日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。